

尾道市民遺産に登録しませんか？

尾道市民遺産とは？

尾道にはたくさんの指定・登録文化財がありますが、その他にも尾道には固有の物語を形作る歴史や芸術上価値のあるモノがまだまだたくさん存在します。尾道市民遺産とは尾道固有の物語を知る上で必要な物や人々の生活の理解に重要な全ての歴史文化資源を未来に伝え活用していくための取り組みです。



※尾道の歴史や文化を基盤とする物語、テーマです。

登録のながれ



尾道市教育委員会文化振興課
尾道久保一丁目 15-1
0848-20-7425
www.city.onomichi.hiroshima.jp/

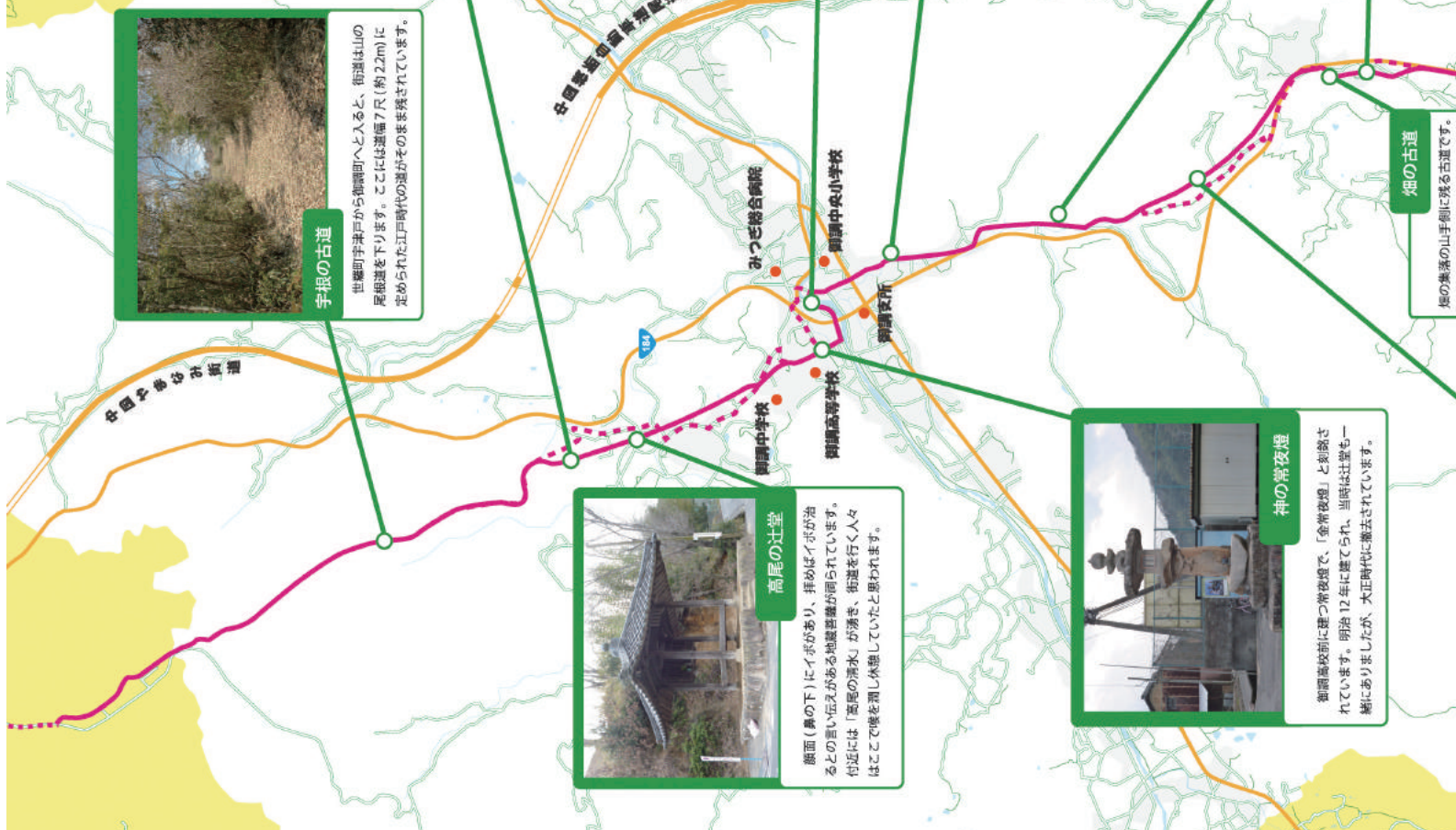
発行 平成 27 年 3 月



尾道市教育委員会

银山街道

银山街道とは、江戸時代、石見银山（島根県大田市大森町）で産出された銀を尾道まで運ぶために整備された、南北約130kmの道のことで、尾道市の市大森町～御調町の字根から市へと南下し、木ノ庄町～美ノ郷町～栗原町を通り、尾道の本陣まで続いています。現在は道路整備されていますが、その中にも昔のままの古道や辻堂、常夜燈など大切に残されているところがあり、かつての街道筋を歩くことができます。



公文の辻堂・常夜燈

ほろ蔵堂によって移転していますが、かつての街道筋に建てられたとされる辻堂と常夜燈が二つ並んで残されています。

御調川の渡し

江戸時代には舟びきをつたって渡っていたといわれています。現在は鉄橋がかけられています。

岩井堂の岩屋崎音

街道筋に置かれた場所には音響効果が安んじられています。建造時期は不明ですが、交通安全や地域の守り神として信仰されていたと考えられます。

畑の古道

畑の集落の山手側に残る古道です。

神の常夜燈

御調小学校に建つ常夜燈で、「常夜燈」と彫刻されています。明治12年に建てられ、当時は辻堂も一層にありましたが、大正時代に撤去されています。

高尾の辻堂

高尾（奥の下）にイボがあり、拝めばイボが治るとの言い伝えがある地蔵堂が祀られています。付近には「高尾の清水」が湧き、街道を行く人々はこの水を飲み休養していたとされます。

字根の古道

世帯町字根甲から御調町へと入ると、街道は山の尾根道を下ります。ここには道幅7尺（約2.2m）に定められた江戸時代の道がそのまま残されています。

市の常夜燈

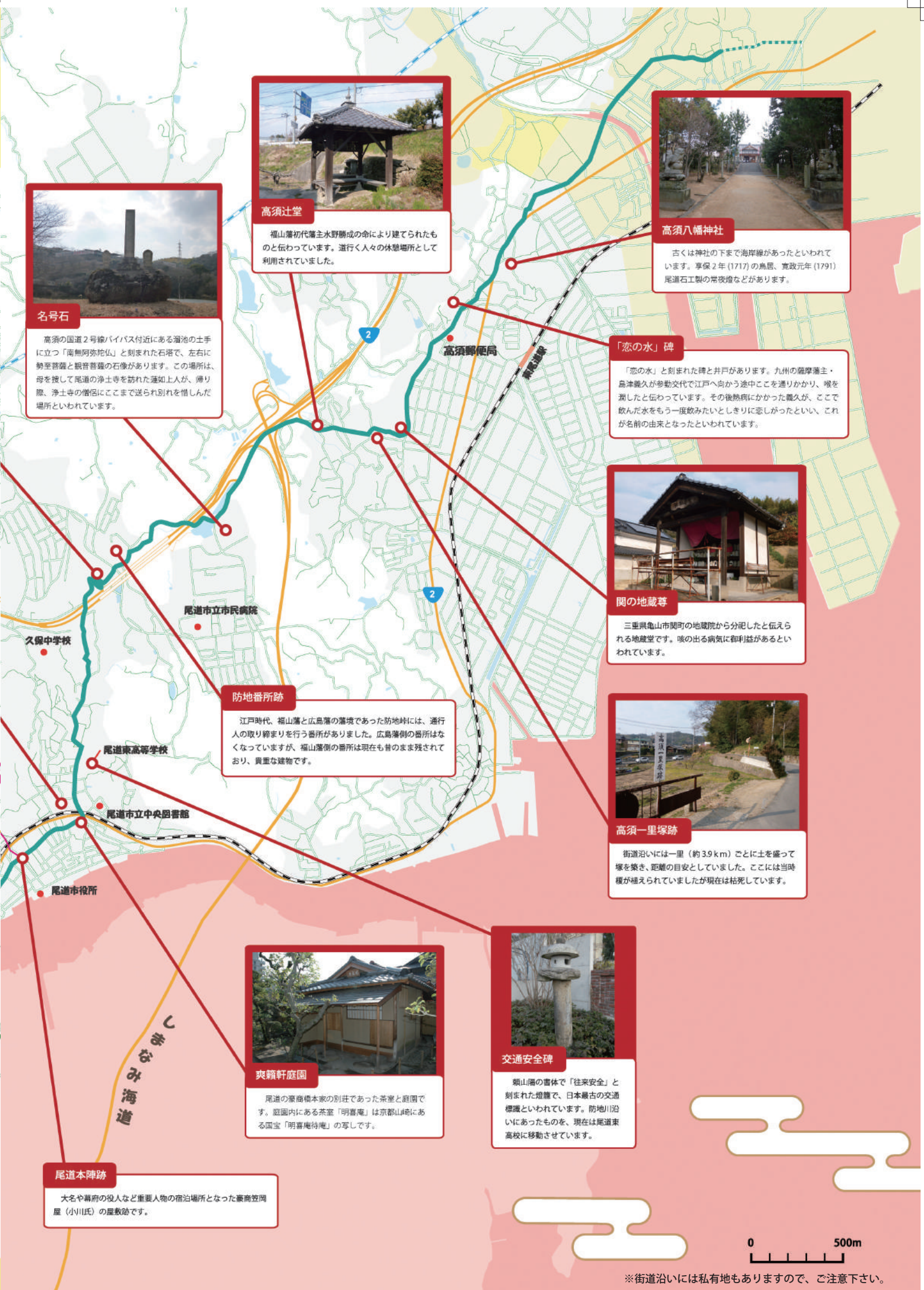
金屋大陣屋と別れた常夜燈で、原面を玉垣で囲まれています。弘化4年（1847）に建てられています。

西畑の常夜燈

「光」と彫刻された常夜燈です。

音

常夜燈は街道沿いに一晩中音が響き、もして歩くために設置された防音物で、音道の安全とともに街道の案内も担っています。



名号石

高須の国道2号線バイパス付近にある瀧池の土手に立つ「南無阿弥陀仏」と刻まれた石塔で、左右に勢至菩薩と観音菩薩の石像があります。この場所は、母を度して尾道の浄土寺を訪れた蓮如上人が、降り際、浄土寺の僧侶にここまで送られ別れを惜しんだ場所といわれています。

高須辻堂

福山藩初代藩主水野勝成の命により建てられたものと伝わっています。道行く人々の休憩場所として利用されていました。

高須八幡神社

古くは神社の下まで海岸線があったといわれています。享保2年（1717）の高尾、寛政元年（1791）尾道石工製の常夜燈などがあります。

「恋の水」碑

「恋の水」と刻まれた碑と井戸があります。九州の薩摩藩主・島津義久が参勤交代で江戸へ向かう途中ここを通りかかり、喉を潤したと伝わっています。その後熱病にかかった義久が、ここで飲んだ水をもう一度飲みたいとしきりに恋しがったといい、これが名前の由来となったといわれています。

関の地藏尊

三重県亀山市関町の地藏院から分祀したと伝えられる地藏尊です。咳の出る病気に御利益があるといわれています。

高須一里塚跡

街道沿いには一里（約3.9km）ごとに土を盛って塚を築き、距離の目安としていました。ここには当時塚が補えられていたが現在は枯死しています。

防地番所跡

江戸時代、福山藩と広島藩の藩境であった防地峠には、通行人の取り締まりを行う番所がありました。広島藩側の番所はなくなっていますが、福山藩側の番所は現在もそのまま残されており、貴重な建物です。

爽頼軒庭園

尾道の豪商徳本家の別荘であった茶室と庭園です。庭園内にある茶室「明喜庵」は京都山崎にある国宝「明喜庵待庵」の写しです。

交通安全碑

福山藩の書体で「往来安全」と刻まれた燈籠で、日本最古の交通安全碑といわれています。防地川沿いにあったものを、現在は尾道東高校に移動させています。

尾道本陣跡

大名や幕府の役人など重要人物の宿泊場所となった豪商笠間屋（小川氏）の屋敷跡です。

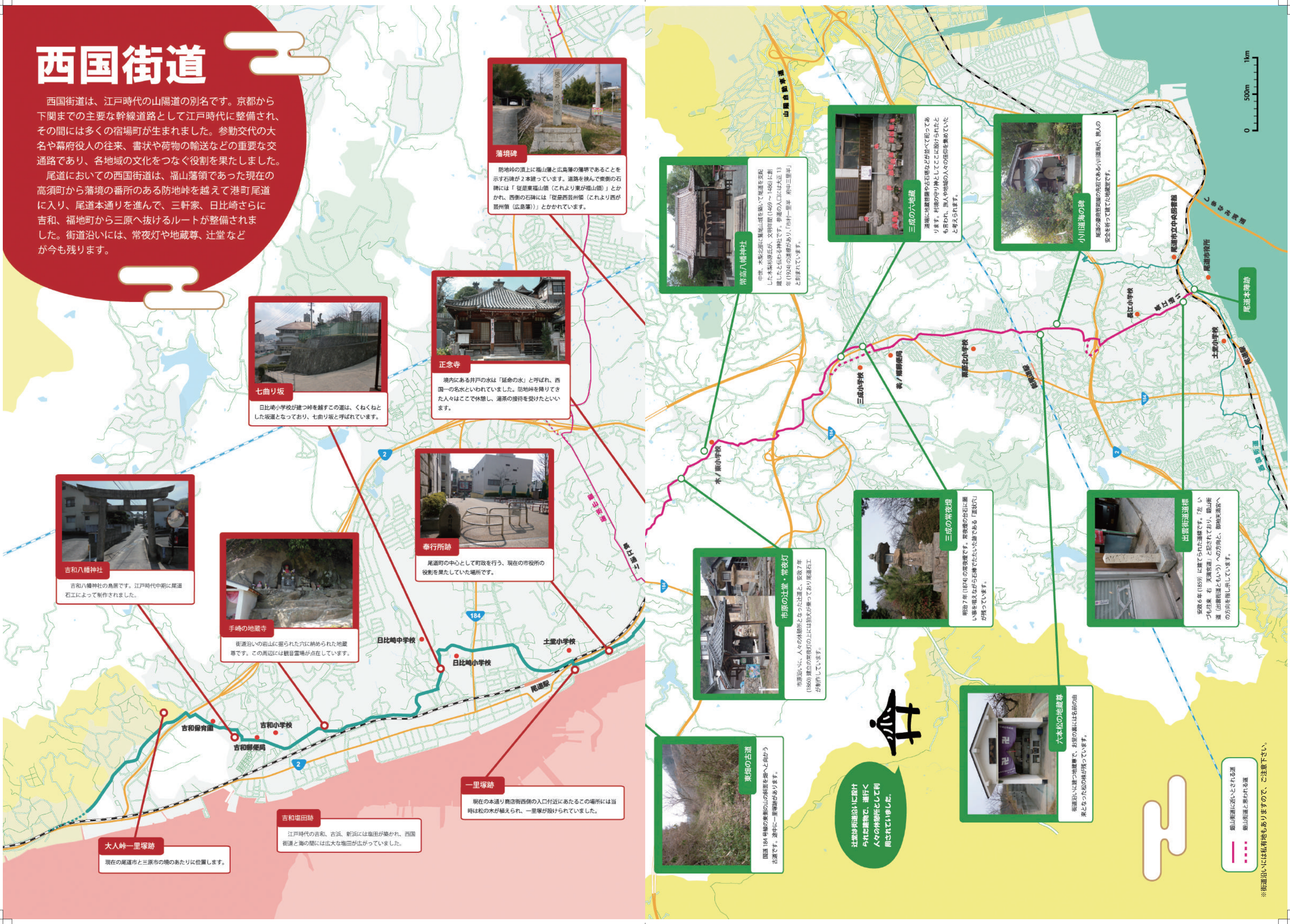


※街道沿いには私有地もありますので、ご注意ください。

西国街道

西国街道は、江戸時代の山陽道の別名です。京都から下関までの主要な幹線道路として江戸時代に整備され、その間には多くの宿場町が生まれました。参勤交代の大名や幕府役人の往来、書状や荷物の輸送などの重要な交通路であり、各地域の文化をつなぐ役割を果たしました。

尾道においての西国街道は、福山藩領であった現在の高須町から藩境の番所のある防地峠を越えて港町尾道に入り、尾道本通りを進んで、三軒家、日比崎さらに吉和、福地町から三原へ抜けるルートが整備されました。街道沿いには、常夜灯や地藏尊、辻堂などが今も残ります。



藩境碑

防地峠の頂上に福山藩と広島藩の藩境であることを示す石碑が2本建てられています。道路を挟んで東側の石碑には「從是東福山領（これより東が福山領）」とかがかれ、西側の石碑には「從是西長州領（これより西が長州領（広島藩））」とかがかれています。

常高八幡神社

中世、本郷北部に繁栄した福山藩を象徴する石碑を祀った本郷八幡神社が、文明開化（1469～1486）に創建したと伝わる神社です。参道の入口には天正13年（1585）の建立があり、「市村一里半 村中三軒家」と刻まれています。

三成の六地藏

尾道に地藏菩薩や古石塔などが並んで祀られています。村の守護神としてここに祀けられたとも言われ、旅人や地域の出入りの指印を兼ねていて考えられます。

小川運海の碑

尾道の藩政管理の発着である小川運海が、旅人の安全を祈って建てた地蔵尊です。

七曲り坂

日比崎小学校が建つ峠を越すこの道は、くねくねとした坂道となっており、七曲り坂と呼ばれています。

正念寺

境内にある井戸の水は「延命の水」と呼ばれ、西国一の名水といわれていました。防地峠を降りてきた人々はここで休憩し、湯茶の接待を受けたといわれています。

吉和八幡神社

吉和八幡神社の鳥居です。江戸時代中期に尾道石工によって制作されました。

手崎の地藏尊

街道沿いの岩山に祀られた穴に納められた地藏尊です。この周辺には観音霊場が点在しています。

奉行所跡

尾道町の中心として町政を行う、現在の市役所の役割を果たしていた場所です。

市原の辻堂、常夜灯

市原沿いに、人々の休憩所となった辻堂と、安政7年（1860）建立の常夜灯の上には狛犬がまつられており尾道石工が制作されています。

三成の常夜燈

明治7年（1874）の常夜燈です。常夜燈の右石に黒い字を施した常夜燈の石塔が祀られています。

出雲街道道標

安政6年（1859）に建てられた道標です。「左いづも往来 右 出雲街道」と記されており、福山街道（出雲街道ともいう）への方向と、御油清宮への方角を指示しています。

六本松の地藏尊

街道沿いに建つ地藏尊で、お堂の裏には名前の由来となった松の株が残っています。

東郷の古道

国道184号線の東郷の山の斜面を掘りかき、向かう古道です。途中に一里塚跡があります。

一里塚跡

現在の本通り商店街西側の入口付近にあたるこの場所には当時松の木が植えられ、一里塚が設けられていました。

吉和塩田跡

江戸時代の吉和、古浜、新浜には塩田が築かれ、西国街道と海の間には広大な塩田が広がっていました。

大人峠一里塚跡

現在の尾道市と三原市の境あたりに位置します。

辻堂は街道沿いに設けられた建物で、通行く人々の休憩所として利用されていました。

福山街道に近いとされる道
福山街道と異なる道

※街道沿いには私有地もありますので、ご注意ください。

銀山街道

銀山街道と尾道

銀山街道は、石見銀山の産出銀を尾道の港まで運ぶため、江戸幕府初代銀山奉行の大久保長安(1545～1613)によって開発・整備された道です。銀の貯蔵場所がある大森の代官所を出発して南へ下り、中国山地を越えて三次、甲山、御調を通り、尾道の本陣を終点とする、南北約130kmの道でした。

銀の輸送は年に一回、旧暦の10月下旬から11月初旬にかけて行われました。この輸送は牛馬約300頭、人足約400人をかけた大変大規模なものでした。隊列を組んだ輸送隊は3泊4日の行程でこの道を歩き、尾道まで銀を運んだのです。尾道に到着すると、銀は本陣笠岡屋に預けられたのちに船に積みこまれ、瀬戸内海を通過して大阪の銀座に運ばれ、そこから京都の銀座に移され、銀貨に鑄造されていました。



長江の銀山街道沿いの道



尾道遺跡から出土した陶磁器

交通の拠点、尾道

尾道は古くから港町として発展してきましたが、江戸時代には石見銀の積み出し港として、また北前船など各地から多くの船が集まる地として、ますます重要な港町となって繁栄しました。

また江戸時代には銀山街道に加えて西国街道も通るようになり、宿場町としても大いに栄えました。

海上交通、陸上交通の両方において重要な拠点となった尾道にはたくさんの人、もの、文化が行き交いました。

尾道遺跡の発掘調査では商家や民家の跡地から国内外の陶磁器など江戸時代の交易品が数多く出土しており、さまざまな地域との交流があったことがうかがえます。

尾道にはたくさんの商人がいましたが、その中でも特に力を持ち、さまざまな事業を行って財をなした商人を豪商といいます。尾道では橋本家など、近世を通して数多くの豪商が生まれ活躍しました。

石見銀の引渡し場所であった笠岡屋(小川氏)は戦国時代から江戸時代初期にかけての尾道を代表する豪商で、尾道町の代官を務めるなど、町の中心的役割を担っていた一族です。笠岡屋の屋敷は西国街道沿いの本陣にも指定されており、現在の本通りの小川小路一帯を占める大邸宅であったといえます。



本陣笠岡屋の屋敷があった小川小路

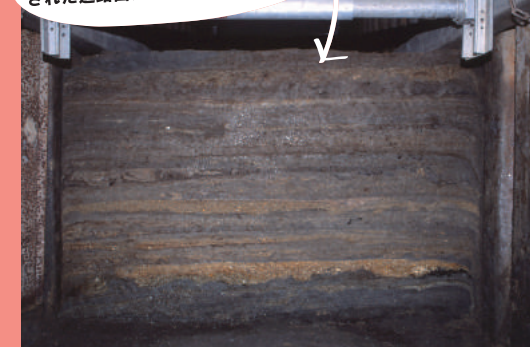
西国街道

宿場町尾道

江戸時代に入ると、江戸を起点とした五街道と、そこから枝分かれして各地へ通ずる脇街道が設定され、国内の交通網が整備されました。西国街道はその脇街道にあたり、京都から下関をつなぎ、外交の拠点である長崎へ至る道としてとくに重要視されていました。街道は道幅を統一して整備され、距離の目標となる一里塚や、方向を指し示す道標などが各地に設けられました。

街道沿いには往来する人々が宿泊したり、書状や物資の輸送、人馬の継ぎ立てなどを行うための宿駅が一定間隔ごとに設けられました。尾道はその宿駅の一つに指定され、しだいに街道を中心とした宿場町として栄えるようになりました。西国街道は現在の尾道本通り商店街を通過しており、ここが宿場町尾道の中心部でした。この道は西国街道として整備される以前の室町時代

中世から近世にかけての平らに整地された道路面が積み重なっている。



街道の土層断面

の頃から道路として使用され続けていたことが発掘調査によってわかっています。

宿場町尾道には参勤交代の大名や幕府の役人など重要人物の宿泊する本陣・脇本陣や、町を取り締まる奉行所などが整えられ、街道沿いにはたくさんの商家や民家が立ち並びました。そのにぎやかな様子は安永3年(1774)の尾道の様子を描いた絵図からうかがうことができます。



尾道市重要文化財 紙本著色尾道絵屏風(浄土寺蔵)

藩境と番所

防地峠は、福山藩と芸州(広島)藩との藩境にあたり、江戸時代には番所が設けられました。番所は、街道を通行する人や荷物を監視し、厳重な取り締まりが行われた場所です。現在は、福山藩番所の建物が残っており、江戸時代の番所として貴重な建物です。他に藩境の石碑も残存しています。



福山藩番所の建物



藩境碑(広島藩)